

赤木桁平

描写の傾向及び特質



# 描写の傾向及び特質



普通一般の小説などに現れる描写は、大抵の場合、これを分類して性格描写、心理描写、及び自然描写の三つにすることが出来る。一つの事件に就いて、若しくは、一つの場面に就いての描写は、その本来の性質上、これを当然自然描写の中に算入してもいいわけであるが、これらの方面に於ける描写は、所謂意味の描写中に在って、しかく重大なる意義を持つべきものではない。

既に幾度となく、自分は漱石先生の性格描写に就いて

云った。そして先生の性格描写が、その出来栄えに於いて非常に卓越したものであることをも云った。——この事実を例証するために、今、自分は『三四郎』に出て来る与次郎の性格描写に就いて研究して見よう。第三回の初めに於いて、三四郎は大学の講堂で或る教授の講義を聴いていた。その時自分の隣席に一人の男がいた。その男は「感心に根気よく筆記を続けている。覗いて見ると筆記ではない。遠くから先生の似顔をポンチに書いていたのである。三四郎が覗くや否や隣りの男はノートを三四郎の方に出して見せた。画は旨く出来ているが、傍に

ひさかた  
久方の雲井くもいの空の子ほととぎす規と書いてあるのは何の事だか判  
じかねた」。講義が終つてから、三四郎は二階の窓に頬  
杖を突いてぼんやりしていると、そこへポンチ画の男が  
来て「大学の講義は詰らんなあ」と云つた。三四郎は翌  
日も学校に出て「昼飯を食いに下宿へ帰ろうと思つたら、  
昨日ポンチ画をかいた男が来て、おいおいと云いながら、  
本郷の通りの淀見軒という所に引つ張つて行つて、ライ  
スカレトを食わした」。そして色々なことを教えた。最  
後に小泉八雲先生の話が出て、先生が教員控室へ這入る  
のが嫌いであつたといふので、三四郎がその理由を聞く

と、ポンチ画の男は「そりや当り前ださ。第一彼等の講義を聞いても解るじやないか。話せるものは一人もいやしない」と手痛い事を平気で云った。——この男が与次郎である。『三四郎』を読んで茲まで来ると、大抵の読者の頭には、最早与次郎という奇警な性格が、かなりはつきりした影像を結んで来るであらう。

一週四十時間に及ぶ学校の講義に圧迫されて、心中何となく物足りなさを感じていた三四郎が、或日与次郎に逢って其話をすると、与次郎は四十時間と聞いて、眼を丸くして、「馬鹿馬鹿」と云ったが、「下宿屋のまづい



飯を一日に十返食つたら物足りるようになるか考えて見ろ」といきなり警句でもって三四郎を打し付けた。三四郎はすぐさま恐れ入って「どうしたら善かろう」と相談を持ちかけると、与次郎は「電車に乗るがいい」と一喝して置いて、その晩は三四郎を拉らっして新橋から日本橋の方を電車で乗り廻し、平の屋へ行って京都料理を食わせ、木原店きはらだなへ行って小さんを聞かせた。その後も与次郎と図書館で逢った。千駄木の林町でも逢った。林町で逢った時には、広田先生が与次郎を評して「丸行灯まるあんどう」だと云った。「丸行灯」の与次郎が発心して愈々広田先生の大学

教授就職運動を初め、所謂「偉大なる暗闇」という大論文を書いた。その間に与次郎は広田先生の金を以て馬券を買った。馬券の穴埋めには三四郎の金を借りた。金を借り放しにされた三四郎が美禰子から融通して貰って、漸く一時の難関を切り抜けたのを見ると、金を借り放しにした与次郎は「己が金を返さなければこそ君が美禰子さんから金を借りる事が出来たんだらう」と云って嘯うそぶいている。最後に「偉大なる暗闇」問題が広田先生に分ると、遠さすがの与次郎も大いに恐縮して、早速ありのままの事実を自白して先生に詫びたが、それが済むとすぐ文

芸協会の切符を懸命に売り歩いている……。

云うまでもなく、『三四郎』に描き出されている与次郎という男は、偕かに一種風変りの奇警なる性格に相違ないが、その奇警なる性格が実によく描けている。従つて、如何なる場面に出て来ても、与次郎は徹頭徹尾与次郎らしく活躍して、聊かも与次郎らしからぬ言動はない。例えば、恩師の大学教授就職運動を起して失敗するところも遺憾なく与次郎の面目を發揮しているし、また、恩師の大切な金を私わたくしして馬券を買い、その全部を立派に摺すって終しまうところも痛快に与次郎の特色を露出してい

る。しかも作者はさらに説明を加えて「与次郎は中々人に払わせない男である」と云っている。なるほど頭の先きから足の先きまで与次郎に相違ない。——併し、これは独り与次郎に限ったことではなく、先生の作品に出て来る大抵の人物は、皆こうした意味に於いて活躍する。

『虞美人草』の宗近も、『それから』の代助も、『彼岸過迄』の須永も、『行人』の哲学者も、乃至は『明暗』の津田も、すべて皆然りと云っている。

上に述べた与次郎の実例に就いて見ても明かであるように、漱石先生の慣用された性格描写は、その人物の個

性に具わるすべての側面サイドなり属性なりを丹念に描き上げ、その自然の結果として或種の纏まった感じを浮き出させるといふ風なものではなく、むしろその人物の個性に具わる少許すこしばかりの性癖なり特質なりを印象的に写し出し、その当然の所産として或種の統一された匂いを生み出させるといふ風なものである。同じく『三四郎』にあつても広田先生のごときは慥かにその一例であつて、この種の傾向は特に前半期の作品に於いて甚しい。

——後半期になると、性格の発展が深く心理の基礎に立っているから、その描写もまた漸く細緻の趣を増して

いる。『明暗』の津田やお延のごときは、正しくその適例というべきである。

性格描写に次いで注目すべきものは心理描写であるが、漱石先生の心理描写は、これまた一種の特徴を俱えている。茲に二つばかりその実例を挙げて見よう。

アテシゴを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覚悟であつた。から心こころに落ち着きがある。刺戟が少い、そういう状態で壁へ倚りかかっている。と、其の状態がなだらかに進行するから、自然の勢

いとして段々気が遠くなる、魂が沈んで行く。こういう場合に於ける精神運動の方向は、いつも極まったもので、必ず積極から出立して次第に消極に近づく径路を取るのが普通である。所が其の普通の径路を行き尽くして、もう是れがどん詰だという間際になると、魂が割れて二様の所作をする。第一は順風に帆を上げる勢いで、此どん底まで流れ込んで仕舞う。すると夫限死それぎりぬ、でなければ、大切の手前おおぎりまで行って、急に反対の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極

の頭へ戻る。すると、命が忽ちたちま確實になる。自分が梯子はしごの下で経験したのは此の第二に当る。だから死に近づきながら好い心持に、三途の此方側まで行ったものだが、順路をてくてく引き返す手数を省いて、急に、娑婆の真中に出現したのである。自分は之を死を転じて活かつに帰す経験と名づけている。

所が梯子の中途では、全く之と反対の現象に逢った。自分は初はつさんの後を追っ懸けて登らなければならぬ。其の初さんは、とつくに見えなくなつて仕舞った。心は焦る。気は揉める。手は離せない。自



分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。——万事が痛切である。自覚の強度が次第次第に劇しくなる許りである。だから此の場合に於ける精神運動の方向は、消極より積極に向って登り詰める状態である。偕さて其の状態がいつまでも進行して、奮興の極度に達すると、矢張り二様の作用が出る訳だが、とくに面白いと思うのは其一つ、——即ち積極の頂点からとんぼ返りを打って、魂が消極の末端にひよつくり現われる奇特である。平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切った途端に、命を棄て様と決心

する（中略）。

話すところなる。——愈々いよいよ死んじまえと思つて、  
体を心持後あとへ引いて手の握りをゆるめかけた時に、  
どうせ死ぬなら、此処で死んだつて冴えない。待て  
待て出てから華嚴の瀑たきへ行けという号令——号令は  
変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き渡つ  
た。ゆるめかけた手が自然と緊しまつた。曇つた眼が、  
急に明るくなった。カンテラが燃えている。仰向く  
と、泥で濡れた梯子段が、暗い中迄続いている。是  
非共登らなければならぬ。もし途中で挫折すれば

犬死になる。暗い坑あなで、誰も人のいない所で、日の目も見ないで、あらがね 鉋と同じ様にころげ落ちて、それっきり忘れられるのは——案内の初さんにさえ忘れられるのは——よし見附かっても半獣半人の坑夫共に軽蔑されるのは無念である。是非共登り切っちまわなければならぬ。カンテラは燃えている。梯子の先には坑が続いている。坑の先には太陽が照り渡っている。広い野がある。高い山がある。野と山を越して行けば華嚴の瀑がある。——どうあっても登らなければならぬ。（『坑夫』）



それはそれとして、何故あの時清子きよこの存在を忘れていたのだらうという疑問に推し移ると、津田は我ながら不思議の感に打たれざるをえなかつた。

「それ程自分は彼女に対して冷淡なのだらうか」  
彼は無論左右そでないと信じていた。彼は食事の時、既に清子のいる方角を、下女から教えて貰った位であつた。

「然しお前はそれを念頭に置かなかつたろう」  
彼は實際廊下を烏鷺烏鷺歩行しているうちに、清子を何処かへ振り落した。けれども自分の何処を歩いているか知らないものが、他が何処にいるか知ろう筈はなかつた。

「此見当だと心得てさえいたならば、ああ不意打を食うんじやなかつたのに」

斯う考えた彼は、もう第一の機会を取り逃したよ  
うな気がした。彼女が後を向いた様子、電気を消して上り口の案内を閉塞した所作、忽ち下女を呼び寄

せるために鳴らした電鈴ベルの音、是等のものを綜合して考えると、凡てが警戒であつた。注意であつた。そうして絶縁であつた。

然し彼女は驚いていた。彼よりも遙か余計に驚いていた。それは単に女だからとも云えた。彼には不意の裡に予期があり、彼女には突然の中にただ突然がある丈であつたからとも云えた。けれども彼女の驚きはそれで説明し尽せているだろうか。彼はもつと複雑な過去を觀面てきめんに感じてはいないだろうか。

彼女は蒼くなつた。彼女は硬くなつた。津田は其

所に望みを繋いだ。今の自分に都合のいいようにそれを解釈して見た。それから又其解釈をして見た、それから又解釈を引繰返して、反対の側からも眺めて見た。両方を眺め尽した次には何方が合理的だろうという批判をしなければならなくなった。其批判は材料不足のために容易に纏まらなかった。纏まってもすぐ打ち崩された。一方に傾くと彼の自信が壊しに来た。他方に寄ると幻滅の半鐘が耳元に鳴り響いた。不思議にも彼の自信、卑下して用いる彼自身の言葉で云うと、彼の己惚おのぼれは胸の中にあるような気

がした。それを攻めに來る積つもりでいながら、彼は常に親疎の區別を其間に置いていた。というよりも、遠近の差等とうが自然天然属性として二つのものに元から具わっているらしく見えた。結果は分明ぶんみやうであつた。彼は叱りながら己惚の頭を撫でた。耳を傾けながら半鐘の音を忌いんだ。（『明暗』）

茲ここに挙げた二つの实例は、その一つを漱石先生の心理描写が初めてその作物に現れたともいふべき『坑夫』に採り、今一つを先生の心理描写が殆んど完成したとも見



るべき『明暗』に採ったものである。前者に描かれているものは、作中の主人公が坑内に於いて不<sup>ふ</sup>凶<sup>と</sup>自殺を決意し、また、不<sup>ふ</sup>凶<sup>と</sup>自殺の決意を棄てた瞬間に於ける心理状態であり、後者に描かれているものは、同じく作中の主人公が某温泉場で突然出会した、嘗<sup>かつ</sup>て相思の間柄でありながら、現在は全く相離れた関係にある女に就いて経験する心理状態であるが、こうして二つを比較的<sup>比較的</sup>に並べて見ると、何人の眼にも直ちに注意を惹くことは、この二つの心理描写間に存するかなりの相違である。併し、それは今茲に問題とすることを避け、自分は一<sup>ひと</sup>先<sup>ま</sup>ず『坑夫』

に於ける心理描写のみに就いて、その大体の傾向及び特質を観察して見よう。

『坑夫』に於ける心理描写は、その第一の特徴として非常に分析的であり、且つ、非常に解剖的である。言葉を換えて云うと、何かから何まで原因を覓ね、何かから何まで因縁を探ねて、どれほど些細なる心持、どれほど繊細なる気分をも、すべてその本源の心理にまで遡らなければ承知しないという風である。如何にもよく行き届いていゝる。如何にもよく掘り穿うがっている。併し、その如何にもよく行き届き、如何にもよく掘り穿った心理の解剖が、

読者の頭には何となく飽き足りない感じがする。さらに打明けて云うと、その表面に於いては一々御尤もごもつとであると感じながら、その裏面に於いてはなかなか御立派と承服しかねるのである。その理由は果して何処にあるのだろうか。

すべて人間の心理を描いたものは、それがどれほど綿密周到なる記述であろうと、単に頭の中で纏め上げられ、単に理窟の上で捏こね上げられたものでは仕方がない。単に頭の中で纏め上げられ、単に理窟の上で捏こね上げられたものは、たとい仮令心理の基調を描き出すことは出来ても、

到底心理の色合を描き出すことは出来ないからである。従つて、それが一貫したる筋道を持つてば持つほど、また、統一したる経過を持つてば持つほど、その心理の描写は益々現実味の潑刺を喪い易く、所謂真当の「心持ち」からは遠ざかり勝ちになるのである。——こう考えて来ると、自分が『坑夫』の心理描写に飽き足りない点は、全くそれが頭の中で纏め上げられ、理窟の上で捏ね上げられているところには在るのではないかと思う。實際、『坑夫』の心理描写はあまりに弁証的過ぎる弊害を持つている。『坑夫』の心理描写に現れているこの種の傾向は、爾後

の諸作、例えば『三四郎』、『それから』、『門』などの  
ごとき作品に於いても断えず現れている傾向であるが、  
それが『彼岸過迄』、『行人』などの諸作を経て『心』、  
『道草』などの諸作に至ると、一作は一作ごとに実験的  
な色を加えて来て、最後の大作『明暗』にあつては殆ん  
ど完成の域に達している。——自分が茲に抜抄した一節  
のごときも、明かにその事実を立証していると思う。

元来、『明暗』という作品の有する芸術的興味の大半  
は、その累々相重ねて層を成す心理の描写にあるのであ  
つて、その最も鋭利な洞察の的となつてゐるものは、云

うまでもなく男女の両主人公たる津田とお延とである。中にも津田の心理がよく描けている。如何なる場合にも自己の利害を中心として打算し、何処までも自分に都合のいいことばかり考えている軽薄な、身勝手な人間、言い換えると、その辺に始終うろうろしていそうなエゴイストの心持、——そういう心持を描く点に於いて、先生の筆は最早行くべきところまで行っている。尤も、その心理に於ける<sup>えぐ</sup>割り方の深さに於いては、間々『明暗』の方が『心』よりも劣っているようなところがないではないが、それは寧ろ取材そのものの關係に因るのであつ

て、若し、『明暗』が完結するまで続稿されていたならば、それは必ずや『心』の深さにまで到達していたに相違ない。

併し、先生の心理描写は、未だドストエフスキーのそれに於けるがごとき深酷なものではない。どれだけ執拗に、どれだけ頑固に心理の締結ていけつ爬羅はらを続けているようであつても、大抵今一息というところで止まっている。こうした感じは『心』や『行人』のごとき作品に於いて特に著しく経験するところであつて、先生の心理描写を一貫する最大の弱点である。

『明暗』の二十九頁に次ぎのような一節がある。津田が吉川という実業家を訪問する心理が解剖されているのである。

彼はとうとう自分の家とは反対の方角に走る電車に飛び乗った。吉川の不在勝がちな事をよく知り抜いている彼は、宅迄行った所で必ず会えるとも思っていない。なかつた。たまさか居たにした所で、都合が悪ければ会わずに帰される丈だということも承知していた。然しかし彼としては時々吉川家の門を潜くぐる必要があ



った。それは礼儀の為でもあった。義理の為でもあった。又利害の為でもあった。最後には単なる虚栄心の為でもあった。

「津田は吉川と特別の知り合いである」

彼は時々斯ういう事実を脊負つて見たくなつた。それから其荷を脊負つた儘みんなの前に立ちたくなつた。しかも自ら重んずるといつた風の彼の平生の態度を毫も崩さずに、此事実を脊負つていたかつた。物をなるべく奥の方へ押し隠しながら、其押し隠している所を、却つて他に見せたがるのと同じような

心理作用の下に、彼は今吉川の玄関に立つた。そうして彼自身は飽く迄も用事のためになおざわざ此所へ来たものと自分を解釈していた。

何人が読んで見ても、この一節の心理描写のごときは、その反覆に反覆を重ねられたる解剖と分析との裡に、うち一点の疑義をも挟むことを許されないだけの明快を見出すに相違ない。併し、その明快を見出すとともに、恐らく猶お何物かの描き足りなさを発見するに相違ない。しかも、自分の見るところを以てすると、この種の描き足

りなさが由って来る所以は、自分の所謂心理の色合に於いて欠けるところがあるからでなく、寧ろ反って、その心理洞察の鋭さに於いて足りないところがあるからではあるまいか。この意味に於いて、明快であるということとは、必ずしも透徹であるということではない。

嘗て、デイミトリ・メレジュコフスキーは、ドストエフスキーの心理観察を評し、「所謂ドストエフスキーの心理観察と呼ばれるものは、人間の魂を測定し研究し吟味するための最も精確にして最も的確なる道具や器械の備われる一大実験室を思出さしめる」と云い、また「彼

れの眼は一見他人の眼に見るを許されざるものを先ず見た。彼は従来未だ何人も下りて行かなかつた深みに下りた」と云つたが、このメレジュコフスキーの言葉を借りて云うと、先生の心理観察に於いて最も欠けているものは、ドストエフスキーの有する所謂実験的な分子であつて、この実験的な分子が欠けているために、自然先生の心理観察は常識的、論理的になり易く、且つ、先生の眼や心は「一見他人の眼に見るを許されざるもの」や「従来未だ何人も下りてゆかなかつた深み」にまで達し悪いのである。さらに言葉を換えて云うと、先生の心理観察

は、自分等の考えうるところ、乃至自分等ないしの見うるところの範囲までは残りなく達しているが、併し、それから向うに存在する境地までは到りえていない。従つて、明快ではあるが、深酷の感じに乏しいのである。

以上、自分は理想的な見地に立つて先生の心理描写を観た。併し、それは字義的に理想論であるがゆえに、先生が嘗て自分等の有した最大の心理観察家であり、且つ、最大の心理解剖家であるためには何等の障碍ともならぬい。

最後に残るところのものは漱石先生の自然描写である

が、元来、先生の小説にはあまり自然描写というものがない。殊に、ツルゲーネフやモーパッサン流のことごときしい自然描写は、先生の寧ろ好まれなかつたものと見え、何時のことであつたか、先生は著者自身に向つて、「小説のなかに余り自然描写を点綴するのは、その作中に描かれてゐる事実そのものにいい効果を与えるよりも、寧ろ反つてその事実自身の印象を稀薄にする虞おそれがある」と云われたことがある。『文学論』の中にも、先生が調和の資料としての自然の風物に論及し、その一節に於いて、「例えば小説の作家其作物の興味を高めんがため、

調和の法を解せずして、同様の境地を妄みだりに疊積して顧みざるが如きは明かに此法を破るものなり」と云つていられるが、その大体の意味に於いては前の意見と等しいものである。従つて、先生の初期の作品などには随分自然描写らしいものが見えてはいるが、その後期に属する作品にあつては、是非とも必要であると思われる場合を除き、殆んど自然描写らしい自然描写は出て来ないと云つていい。例えば『彼岸過迄』を見ても、その或部分には「庭という名の勿体なく聞こえる縁先は五坪いっつぽにも足りなかつた。隅に無花果いちじくが一本あつて、腥なまぐさい空気の中

に、青い葉を少し許り茂らしていた。枝にはまだ熟しない実が云い訳わけほど結なって、其一本の股の所に、空の虫籠が懸っていた。其下には痔しせた鶏が二三羽無暗に爪を立てた地面の中を餓くちばしえた嘴くちばしで喙つついていた」という位くらいの程度に於ける自然描写がないではないが、それとて到底二三カ所以上を数えることは出来ない。『行人』にあつては、その第十一章から第十七、八章までの開に三四カ所の自然描写を見出すが、それとて「自分達は何だか市の外郭らしい淋さむしい土塀つづきの狭い町を曲つて、二三度停留所を通り越した後、高い石垣の下にある濠を見た。



濠の中には蓮が一面に青い葉を浮べていた。其青い葉の中に、点々と咲く紅の花が、落ち着かない自分達の眼をちらちらさせた」という位いが関の山である。『心』に於いては殆んど見当らない。否、殆んどというよりも、寧ろ全くと云った方がいいだろう。仮令あつたにしたらとここで一二行の極く簡単なものに過ぎないからである。これに反して『道草』には随分多く見出される。併し、その殆んどすべては主人公の幼時を追懐した文章中にあるので、作中の事実そのものに密接していいのではない。最後に『明暗』であるが、この作品にも主として事件と

心理とが描かれていて、所謂自然描写というものは見当らない。ただ結末の方に主人公の津田が温泉場に出かける途中の風物を叙したところがあるが、それも例のごとく簡単至極なもので、特に自然描写とか何とか云うべきものではなからう。——この点に於いて、先生晩年の小説は、著しくドストエフスキの小説に似ている。

以上のような理由から、先生の自然描写を觀ようとする、勢い先生初期の作品に遡る必要がある。その中に在って『草枕』と『虞美人草』とは、共に漢文脈を引いた絢爛華麗な叙景が多い。併し、これらの叙景は、そ

の描かれている自然の風物を眼に見るごとく生動させる  
 というよりも、寧ろ文字そのものの有する興味が先きに  
 立っていて、所謂自然描写という点から見ると、極めて  
 価値の乏しいものになっている。例えば、「逡巡として  
 曇り勝ちなる春の空を、もどかしと許りに吹き払う山嵐  
 の、思い切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく  
 晴れ尽して、老嫗の指さす方に巒岫と、あら削りの柱の  
 如く聳えるのが天狗岩だ」（『草枕』）とか、または「天  
 を封ずる老幹の亭々と行儀よく並ぶ隙間に、的皫と近江  
 の湖が光った」（『虞美人草』）とかいう風であって、殆ん

ど写実の妙味が地を払っている。併し、先生は長くこの種の自然描写に満足することがなかった。

自分は既に『二百十日』の一節を抜いて、その巧緻な自然描写を推奨して置いたが、その後の小品文集たる『永日小品』の中には、少くとも数篇の卓すぐれた自然描写を見出すことが出来る。『昔』と題する一篇のごときは、その最も異彩を放ったものである。

ピトロクリの谷は秋の真下にある。十月の日が、眼に入る野と林を暖かい色に染めた中に、人は寝た

り起きたりしている。十月の日は、静かな谷の空気を空の半途中で包んで、じかには地にも落ちて来ぬ。と云って、山向<sup>やまむこう</sup>へ逃げても行かぬ。風のない村の上<sup>かす</sup>に、いつでも落着いて、凝<sup>じつ</sup>と動かずに霽<sup>かす</sup>んでいる。その間に、野と林の色が次第に変わって来る。酸<sup>す</sup>いものが、いつの間にか甘くなるように、谷全体に時代が付く。ピトロクリの谷は、この時百年の昔、二百年の昔にかえって、安々と寂びて仕舞う。人は世に熟れた顔を揃えて、山の脊を渡る雲を見る。其雲は或時は白くなり、或時は灰色になる。折々は薄い底

から山の地を透かせて見せる。いつ見ても古い雲の心地がする。

自分の家は、此雲と此谷を眺めるに都合よく、小さな丘の上に立っている。南から一面に家の壁へ日があたる。幾年十月の日が射したものか、何処も彼処かしこも鼠色に枯れている西の端に、一本の薔薇が這いかかって、冷たい壁と、暖かい日の間まに挟まった花を、いくつか著けた。大きな弁は卵色に豊かな波を打つて、萼がくから翻える様に口を開けた儘、ひそりと処々に静まり返っている。香においは薄い日光に吸われて、

二間けんの空気の裡に消えて行く。自分は其二間の中に立って上を見た。薔薇は高く這い上って行く。鼠色の壁は、薔薇の蔓の届かぬ限りを尽して真直に聳えている。屋根が尽きた処には、まだ塔がある。日は其又上の靄もやの奥から落ちて来る。

足元は丘がピトロクリの谷へ落ち込んで、眼の届く遥はるかの下が、平たく色で埋まっている。其向側の山へ上る処は、層々と樺の黄葉きばが段々に重なり合つて、濃淡の坂が幾階となく出来ている。明かで寂びた調子が谷一面に反射して来る真中を、黒い筋が横

に蜿うねって動いている。泥炭ピートを含んだ溪水たにみずは、染粉そめこを溶いた様に古びた色になる。此山奥に来て、始めてこんな流を見た。(中略)

主人と一緒に崖に下りて、小暗おぐらい路に這入った。スコッチ・ファーという常盤木ときわぎの葉が、刻み昆布に雲が這いかかって払っても落ちない様に見える。その黒い幹を、ちよろちよると栗鼠りすが、長く太った尾を揺って駆け上った。と思うと、古く厚みのついた苔の上を、又一匹眸ひとみから疾とく駆け抜けたものがある。苔は脹ふくれた儘動まよかない。栗鼠の尾は蒼黒い地を、



払子ほつすの如くに擦すって暗くらがりがりに這入はいった。(後略)

以上の一文は、先生が英国留学の末年、即ち、明治三十五年の十月スコットランド地方を旅行せられた時に實際目賭もくとせられたところを、後に至って追想的に描かれたものであるが、単に異国の風物を眼に見るごとく描き出してあるというよりも、寧むしろその地特有の匂いなり感じなりを浮き出させて、読者の心持ちをも宛然えんぜん彼地にあるがごとき思いあらしめるといふ風である。こうした傾向は独りこの一文に限らず、先生の自然描写そのものを

一貫する著しい特徴の一つであつて、容易に他作家等の追従を許さない点である。

『倫敦消息』などの文章が明かに立証するごとく、先生は当初写生文風の描写を主としていられたが、併し、先生の写生的傾向は、世の所謂写生文家のそれのいわゆるように、一事一物の微をも残りなく描き出すというのではなく、その与えられたる対象の最も著しい部分を捉えて、これを出来るだけ印象的に描き出すというのである。その『文学評論』に於いて、先生がデフォーの写實的傾向を非難し、「書かないでも済む事、書いて邪魔になる事、余計

な事、重複する事を遠慮なしに書いて、是が写実だとい  
うならば、其写実とは外に何の意味も有していない、た  
だ小説になつていないという事になる」と云われたのは  
茲こゝであつて、先生の作品が晩年に至るほど写実的になつ  
たに關らず、猶なおその描写が印象的な強みを多量に持つ  
ていた所以は、全くこゝうした覚悟があつたからであらう。  
——以上は、勿論一般の描写に就いて言つたことである  
が、その自然描写に於いては、特に、そうした特色が濃  
厚に現れている。

例えば、自分が前に抜抄した『彼岸過迄』、『行人』

などの自然描写や、また、『門』の所在に散点する自然描写にしても、如何にも簡単には相違ないが、それでいて非常に印象的なところが、何となく夕闇の中にぽっかりと浮き出している夕顔の花を見るような感じがする。——『三四郎』の中に次ぎのような一節がある。

丁寧<sup>とこ</sup>に礼を述べて穴倉を上って、人の通る処へ出て見ると、世の中は、まだかんかんしている。暑いけれども深い息をした。西の方へ傾いた日が斜めに広い坂を照して、坂の上の両側にある工科の建築

の硝子窓ガラスが燃える様に輝いている。空は深く澄んで、澄んだなかに、西の果から焼ける火の焰が、薄赤く吹き返して来て、三四郎の頭の上迄熱ほてっている様に思われた。横に照り付ける日を半分脊中に受けて、三四郎は左の森の中へ這はい入った。其森も同じ夕日を半分脊中に受けている。黒ずんだ蒼い葉の間は、染めた様に赤い。太い櫂けやきの幹ひぐらしで茅蝸ひぐらしが鳴いている。

如何にも甘い。真夏の午後に於ける自然の風物に対する描写が、恰あたらも読者の頭に烙やき付くような印象を与え

る。それでいて描写そのものは非常に簡素であつて、管々くだくだしいところや小免倒臭いところは微塵もない。こういう風に肝腎なところを睨つっかり攫つかんで、これを最もエフエクチーブに描き出すところは、単にその形式の上から見ると、幾分マキシム・ゴルキーのそれを思い起させると思う。

先生のような人の眼から見ると、『土』に於ける自然描写のごときは、なるほど余りに綿密過ぎたに相違ない。







日本文学電子図書館

---

## 描写の傾向及び特質

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石」

講談社学術文庫、講談社

2015年12月10日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館